

Sidney E. Zimbalist
 Historic Themes and Landmarks in Social
 Welfare Research

——アメリカにおける社会福祉調査の展開——

井 垣 章 二

社会調査の源流をさかのぼるとき、それが社会福祉と基盤を
 にする極めて深い関連性を有していることに気づくはずである。

社会調査は社会福祉が中心課題とする貧困問題の解明を究極の課
 題とし、社会福祉がその直接救済としてかわった下層・労働者
 階級を対象として生成し展開されたからである。このいわば原点
 における共通性とともに、また社会福祉が対象の自立更生を目指
 し慈善の科学化を志向する慈善組織化運動を経過しケースワーク
 を中心とするソーシャル・ワーク専門技術の最初の基礎を打ちた
 ったとき、なやかくも調査はソーシャル・ワーク主要技術の一形態と
 して位置づけられてもいた(M. Richmond, *What is Social Case
 Work?* 1922)。さらに、社会福祉にかんする活動と研究の標準
 を示す「ソーシャル・ワーク年鑑」は一九二九年の第一巻以来一

貫して「調査」の項目を掲載していた。こうした事実にかかわら
 ず一般に社会福祉の実践者・研究者の多くは、調査を無視しない
 までもそれを周辺に追いやり調査に大きな関心をいだくことはな
 かった。

社会福祉研究の中で「調査」が明確な地位を確立するのは一九
 五〇年代においてである。一九四八年、ハソーシアル・ワーク
 における調査ワークショップに続いて翌四九年、ハソーシアル
 ・ワーク・リサーチ・グループVの結成、五五年全国ソーシアル
 ・ワーカー協会(NASW)結成によりハソーシアル・ワーク・
 リサーチ・セクションとなり、メンバーは五九年で約六〇〇に
 成長する。これとともに、五〇年代には社会事業専門誌に数々の
 「調査」にかんする研究が発表され、一九六〇年ポランスキー

(N. A. Polansky) 編著の *Social Work Research* が刊行される。それはこの道の専門家十数名によって分担執筆されたもので、この種の初めてのテキスト・ブックであったが、マスター・コース上級とドクター・コースに使用されるだけあって標準的一般的というよりかなり高度なものであった。以来十数年、この間社会調査一般については新しいテキスト・ブックが次々と書かれたのに対して、ボランスキーのものに類するソーシアル・ワーク・リサーチの書物はあらわれないことなく、一九七五年これが全面改訂による再刊ということにとどまっている。このこともまたボランスキーのものがやはりほとんど唯一のテキスト・ブックであったことを示すものと考えられよう。今回は時代の変化に応じることも、学部上級においても用い得るテキストとしてきとめ直されたこともあって読みやすいものとなった。これによって従来

より遙かに多くの学生層をとらえるとともに一般に調査離れのソーシアル・ワーカーたちを調査に引き入れる一助となるに違いない。しかし社会調査と社会福祉の深い関連性、社会福祉における調査の重要性を真に体得させる書物として、ここでとりあげるジン・バリストの名著はまことにこの上ないものである。そして社会福祉調査研究にとってはボランスキーのそれとともに欠かすことのできない書物であろう。(なお他に筆者の手にしたのものとして
46 T. Tripodi, *Use and Abuses of Research in Social Work*, 1974. H. Wechsler et al., *Social Work Research in The Human Services*, 1976. があるが、前者はソーシアル・ワークにおける調

アメリカにおける社会福祉調査の展開

査の批判検討であり、後者は雑誌に掲載された諸論文をアレンジしたものである。)

ジン・バリストはかつてインディアナポリスの福祉協議会の調査セクレタリー、現在イリノイ大学にあり、*“What Model for Community Welfare Research” Research in Social Welfare Administration*, 1962. その他二・三の論文によって社会福祉調査研究者としてその名を知るところであったが、この新著はすぐれた調査研究書であるのみでなく、そのものがユニークな社会福祉研究ともなっている力作である。名の通り歴史的研究であるが、社会調査全般についてもこの種のものが全く稀少な中で、非常に貴重である。この歴史的研究は単に現在の立場からする過去の批評にとどまるものでない。それぞれの調査が波及する影響、その調査に対する批判が丹念に集められた当時の資料をもって語られる。社会福祉界において調査研究のたどった紆余曲折、究極的には調査の発達があとづけられる。かくして本書は調査発達史であるとともに、社会福祉の研究と実践の発達史でもある。それは調査の観点からする社会福祉の発達史であり、彼自身がいうように本書は従来の社会福祉研究において欠落していた領域に対するアタックとしての意義も有する。

まず彼は、ソーシアル・ワークが科学的基礎において確立されるためには調査研究が不可欠であると主張し、調査にかかわってソーシアル・ワークの専門化科学化の苦闘の歴史を十分理解することによってソーシアル・ワークの科学性樹立への道が開かれる

アメリカにおける社会福祉調査の展開

こと、現在の調査にかんする諸問題、方法論の真の理解と健全な未来への志向はクラシックの理解のうえにのみ築かれるとして、歴史的パースペクティブの重要性を強調する。本書の題名を構成する歴史的「テーマ」と「ランドマーク」は、前者は調査の中心課題が時代の流れの中に変遷があったことであり、後者はその中でその時期を画する代表的な——影響力、規模、調査法の卓越性において——調査とらうことである。「テーマ」は次の六つに分類され、それぞれが一章を構成する。その手法は先駆的調査から代表的調査まで、調査の背景、内容、調査法が記述され検討される。そこに、「ランドマーク」すなわちオリジナルのさわりの部分が収録されているのが本書の一大特色である。今日では入手極めて困難なものがあり、この点オリジナルに接し得るだけでも価値がある。かくして「テーマ」と「ランドマーク」を表示するなら本書の根幹がよみとれるはずである。一、二章の序説的考察に続いて

第3章 貧困原因にかんする調査

A. G. Warner, *American Charities*, 1894.

第4章 貧困の範囲の測定

C. Booth, *Life and Labour of the People in London*, 1889-1902.

第5章 ソーシアル・サーヴェイ・ムーブメントの勃興と衰退

P. U. Kellogg, *Pittsburgh Survey*, 1914.
P. Klein, *A Social Study of Pittsburgh*, 1938.

第6章 ソーシアル・ワークにおける統計と指標の作成

A. W. McMillen, *Measurement in Social Work*, 1930.

第7章 ソーシアル・ワークにおける評価研究

E. Powers & H. Winner, *An Experiment in Prevention of Delinquency*, 1949.

L. S. Kogam, J. M. Hunt & P. F. Bartelme, *A Follow-up Study of the Results of Social Case Work*, 1953.

第8章 多問題家族から多欠陥社会へ

L. L. Geismar & M. L. Sorte, *Understanding The Multiproblem Family* 1964.

G. E. Brown, *The Multi-Problem Dilemma*, 1968.

そして最終章「回顧と展望」となっている。一見異質のものが並んでいるかのように見えるが、各章それぞれが要領よくまとめられ、その総体が複雑な調査の流れ全体をかえってよく理解できる形に仕上がっている。彼一人によって書き通されたことがよかったのであろう。各章についての詳細は割愛し簡単な総括的紹介をして置く。

イギリスと同じくアメリカでも社会調査は貧困問題にかかわって生成発展されるが、とれだけ貧困が存在するか貧困の測定がまずあって貧困原因の探求が続くイギリスにおけるような普通の経過とは、アメリカは事情を異にしていた。すなわちここでは調査は、第一に貧困原因の探求から始まっており、主として貧困を被扶助として捉え、社会における貧困の存在の全貌を究明すること

には力が注がれず、また貧困の測定についても貧困線を何処に引くかが中心の関心となっていた(第三章)。普通ケロッグのピッツバーグ調査はブースのロンドン調査のアメリカ版として理解されているが、ブースの貧困測定の徹底、科学的客観的立場の堅持に対して、ケロッグの貧困にこだわらない包括的なアプローチと強力なアクションへの志向において大いに調査の性質を異にしていた。イギリスの調査に類すべき貧困測定はアメリカにはない。かくして「第四章」の主役はブースを中心にラウントリーやポーリーであり、ここだけはイギリスの調査が挿入されている。

個人の内部に貧困原因を探し求めていた慈善組織化時代から、ワーナーの調査による社会的環境的原因の発見、革新時代の波にのって圧倒的な社会改良運動の時代が到来する。ソーシャル・ワーカーたちは諸悪の根源を社会に求めて問題を発掘し改良運動を起す。この時代、ソーシャル・ワークは調査活動であり改良運動そのものであった。その頂点を示すケロッグのピッツバーグ調査も、実はE・デヴァインやJ・アダムスなど錚々たるソーシャル・ワーカーが生み出したものであった。この系統の調査はクラインの第二回ピッツバーグ調査によって今日いう福祉調査の形に確立され、現在のコミュニティ・ウェルフェア・リサーチ(ニード調査)に展開される(第5章)。

社会福祉統計の整備、ニードや福祉水準の測定のための指数や指標の作成はコミュニティ福祉調査の一環として位置づけられようが、社会福祉調査としては実践への関連性からすると最も地道

アメリカにおける社会福祉調査の展開

なものであろう。この発展経過の記述(第6章)に続いて、ソーシャル・ワーク専門職の真価を問う評価研究すなわちソーシャル・ワークの効果測定の問題が検討される。効果測定は早くからソーシャル・ワーカーの関心の的となっており、初歩的な試みは今世紀初めにも行なわれるが、それが真に切実な要求となり系統だてられた調査に展開されるのはソーシャル・ワークの専門化の進行過程に結びついている。S・S・サイズの里親委託の効果測定から有名なコーガン・ハントのケースワークの効果測定までがとりあげられるが、効果測定の方法論の論議も含めて最も長い章になっている(第7章)。

本書では最近の傾向すなわち七〇年代についてはとりあげられていない。一つの系統的な傾向として把握できるためには一定の時間的距離が必要であるという考えからである。かくして本書で最新のテーマは時代的には五〇年代から六〇年代初めまで、「多問題家族」をめぐって展開される。B・ペールによる多問題家族の発見に続く家族中心アプローチの登場、接近困難なケースへのアタック等、実践の苦闘の中にソーシャル・ワークの専門化と科学性の樹立への道程がL・L・ガイスマーの「ファミリー・フランクショニング尺度」を中心に多問題家族調査研究をめぐって展開される。他の章とはひどく異質的なこの章の題名設定は、ソーシャル・ワークとも調査とも問題ををそれるかにみえるが、実はわが国にも影響をあたえた「多問題家族」は、理論・実践・調査の全領域においてアメリカ本土を敵うこの時代のソーシャル・

アメリカにおける社会福祉調査の展開

ワークそのものであったのである。とりわけ、今日的アプローチの一つとなったケースワークの焦点の個人から家族への転換、また多問題家族そのものの発掘も調査の生み出したものであったという調査の重要な貢献がここに明らかにされる。

アメリカにおいて社会福祉は、一は他の反動である側面を含みつつ、個人に力点をおく時期と社会に力点をおく時期、調査重視の時期と軽視の時期と、相反する二つのもののいれかわりで進行し、研究関心やテーマも時代によって変化していく。純粹科学でも流行というべき現象があるが、福祉のごとき実践・応用科学は社会的政治的情勢、世論の動向によって変動しやすい。したがって、今後、社会福祉の研究と実践の焦点がどう変化するかは予測は困難である。ソーシアル・ワークが真にその科学性と専門性をうちたてるとき、民衆の熱狂やムーヴメントにのみこまれることなく、焦点と方向を定め確固として進むことができるであろう——これが最終章における総括と展望の主な内容である。丹念な歴史的研究であることよって、「もっと」を期待していたわれわれにとっては何となくもの足りない帰結である。しかし、あるいは、われわれが期待しすぎなのかもしれない。ともあれ本書は「社会福祉調査」研究の必読書であるとともに、一つの新しい「社会福祉」研究の書物として、調査に関心のある人びとばかりでなく広く社会福祉の研究者に読まれる十分な価値があると思う。

(Harper & Row, 1977, pp. 432)